

ふるさと歴史アラカルト

錦帯橋を支える仕組み

平成も残り約2週間となりました。この30年余りの間、岩国はさまざまなことを経験し、姿を変えてきました。中でも錦帯橋はこの間に架替が行われています。今回は、安政4(1857)年に行われた架替と修繕に関する決算書(翌年に作成)を紹介します。

この史料には工事に要した人件費や材料費などが細かく記されています。まず注目されるのは「橋出米」の用途です。これまで橋出米は錦帯橋を架け替えるために領内全域から税金として徴収されたといわれていましたが、この決算書によると架替では一切使われず、修繕に際してのみ使われています。このことから江戸時代の終わりのころには橋出米は錦帯橋を維持するための税金であったことが分かります。

また人件費や材料費の内訳を見ると、錦帯橋がさまざまな人たちによって支えられていることが分かります。例えば主たる人件費として約65日の工事期間中、大工2666人・木挽996人・鍛冶195人など延べ5千人を

超える作業員の費用が挙げられています。彼らには作業賃が支払われていることから、大半は錦帯橋周辺に暮らす町大工や鍛冶職であったと推測され、現場の工事の中核が領民であったことが分かります。

一方、材料費の内訳を見ると、木材・鉄材をはじめ、働く人が暖を取るための火鉢や酒、工事の安全を祈る儀式で用いる熨斗などが挙げられています。こうした雑多な物品や一部の木材は、岩国の有力商人に調達が委託されていました。つまり、職人をはじめ、領内のたくさんの人たちがさまざまな形で協力することで、錦帯橋を整備していく仕組みがあったと言えます。

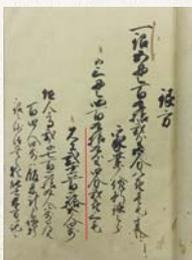
錦帯橋といえばその独創的な構造や技術、創建の経緯に焦点が当てられることも多いですが、一方で錦帯橋を支え続けてきたのは紛れもなく岩国の先人たちでした。時代は平成の次へと変わりますが、錦帯橋を後世へと残すことの仕組みの重要性は、これからも変わることはないでしょう。

岩国徴古館

昭和20年に旧岩国藩主吉川家によって建てられ、その後岩国市に移管された市立の博物館

住所：横山二丁目7-19 ☎0452
休館日：月曜(祝日の場合はその翌日)

※1 「安政五年横山地反橋掛替御普請被仰付一途米銀御入目御算用小日記」(岩国徴古館蔵)
※2 「杵初」と呼ばれる起工式から「棟合」と呼ばれる竣工式までの期間。実際の工事は事前の準備などもあるため、より長くなる傾向がある
※3 他に「日用」と呼ばれる自由労働者も多く雇用された



▶ 決算書には大工延べ2665人余が挙げられています

岩国市 人口・世帯

人口 135,007人 【前月比 - 168人】 男性 64,098人 女性 70,909人

世帯 65,788世帯 【前月比 - 82世帯】 ※外国人人口を含む (平成31年3月1日現在)

交通事故発生件数

2月分事故件数 21件(47件) 死者数 2人(3人) 傷者数 25人(53人)

※高速道路発生分を除く

※()内は平成31年累計

目の不自由な人へ

「広報いわくに」のカセットテープをお貸しします。音声読み上げのためのテキスト版を、ホームページに掲載しています。

お問い合わせはお気軽に、広報戦略課広報班へ ☎29)5016 FAX21)3337